

青年期における恋愛観と父親イメージの研究

A Study of Adolescents' Views of Love and Images of Fathers

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

小手川 佑 里

Yuri Kotegawa

本研究では、①青年期における男子の父親イメージ、②その恋愛観の特徴について検討した。研究Ⅰで、青年期男女を対象に質問紙調査を行い、研究Ⅱで、インタビュー調査を行い、①②について検討した。青年期男子が父親イメージについて、女子との相違点や共通点などを踏まえた考察の裏付けとするため、女子も調査の対象とした。

その結果、男子にとって父親は直接的な存在として、同一化の対象であり、心理的自立をしていく上で重要であることが示唆された。女子にとっても親からの自立を果たし、対象選択を行い、心理的自立をする上で父親の存在が一定の役割を果たしていることが示された。

今後、さらに人数を増やして研究を行うことで、より詳細に探索するとともに、現実的な恋愛関係がいかにして恋愛観として内在化されているのかなど、経時的な研究も課題と考えている。

I. 問題と目的

1. 問題

青年期は、第二の個体化（プロス、1962）の時期であり、親離れ、反抗期を体験し、友人・恋人などの新たな対象との関係も構築されていく。この時期の青年の発達課題である自立は、こうした対人関係の変化とも密接に関わっている。そして、就職、恋愛、結婚などのライフイベントを通じて、自分らしさを作り上げることに重要な課題がある。例えば、山田（2011）は、青年期における心理的自立について、「自分の感情や考え、行動に関して自ら主体的に管理・決定すること、かつ、それらに関して責任をもつこと」と定義している。すなわち、平田（2010）が述べるように、自己の個別性の確立と、他者と適切な関係性を築けることが重視されている。

また、サリヴァン（1953）、プロス（1962）など、青年期の発達段階を分類したうえで、親以外の同性、異性の対象との間で親密な関係を持つことの発達上の意義を論じたものは数多い。コールマン、ヘンドリー（1980）は、「青年期における燃えるような恋愛の経験や親密な関係に没頭してすべてをささげることが、若者の人生にとってもっとも重要なことになりうる」と主張している。そして、エリクソンの概念に基づいて、「親密さには開放性や共有、信頼、関与が関連し、親密さを経験することが、

自己探求の機会を通じてアイデンティティの発達、つまり成熟に貢献する」と述べている。

このように、恋愛とは、自己を確立し、他者と適切な関係性を築く契機の一つであり、家族以外の愛情対象をはじめて求める「選択」であり、以後の他者との関係性にも大きな影響を及ぼす重要な発達の一部である。よって、青年期における恋愛は、青年が心理的自立へ向かうために重要な要因の一つといえる。

また、山内・伊藤（2008）は、青年期における恋愛には、両親の夫婦関係や結婚観が直接的にも間接的にも、青年に与える影響が大きいことを示している。宮下・村山（1996）も、恋愛観を分類し、愛情の乏しい厳格な父親の態度と青年の未熟な恋愛観との関係を検討している。このように、青年の恋愛には親子関係や両親の夫婦関係が影響しており、青年が自立していく上で、父親の存在も重要であると考えられている。

しかし、幼児期以来青年に至るまでの成長過程において、母親の重要性に言及する研究に比べて、父親の存在についてのそれは少ないことが、諸家により指摘されている（柏木、1993）。また、コールマン、ヘンドリー（1980）も、同様な指摘をしたうえで、母親の関与に比べて、父親は何らかの意味で「欠損」しているという認識だけでは、青年期の家族機能の現実的なイメージを確立することはできないとしている。さらに、大野（2016）は、今までの発達研究が扱ってきた親とは、実際には母親のみであったが、2011年頃からは、成人男性、特に親として、家庭人としての男性に注目した発達研究は増加傾向にあるという。しかしながら、成人男性が発達の主体として扱われる研究はいまだに少ない現状を指摘している。

一方、核家族化が進む中、女性の社会進出、夫婦共働きの増加などに伴い、父親役割が注目されている。厚生労働省も2010年6月に育児を積極的にする男性「イクメン」を周知・広報するプロジェクトを立ち上げ、男性の父親役割意識を促し、夫婦で協力できる環境を構築しようと試みてきた。ところで、一般に母親とは、その子どもを産んだ女性のことを指し、母子関係は生物学的にも明瞭である。しかし、樫津（2004）が指摘するように、父親は人類社会発達史の中では社会の『制度』として、人類史のはるか後期に出現したのであり、父親は社会的な存在として規定され、その社会の在り方によって変化するといえる。

また、父性は後天的に、家族間の関係性の中で発展していくものでもあり、父親になる準備には、親からの愛情に満ちた生育、教育、青年期の恋愛体験などによって獲得されるものが重要である。五感を使い、妻や子どもと接する中で、家族への愛情が増し、情緒的側面から父性が形成され、父親としての認識、責任感が形成されるのである（デッカー・丸山、2015）。そして、現代社会が求める理想的な父親像は、①子どもの社会化を促す父親、②家事、育児に協力し、母親のストレスを軽減させる父親であると樫津（2004）は述べている。

さらに、小野寺（1984）は、量的研究における結果に基づき、父親は子どもの人格の発達に重要な役割を果たし、その影響力が男子と女子において異なると、「男子にとっての父親は母親を占有しつつ

けるライバルであり、女子にとっての父親は一生涯の愛情の対象者である」と指摘した。このように、父親と息子との間の関係と、父親と娘との間の関係とは、親子の性の組み合わせに伴い異なる経過を遂げるもので、親と子の交互作用を考察することが重要である。

コールマン、ヘンドリー（1980）は、父親の役割が幼年期から青年期に至るまでほとんど変化しないとし、父親は、長期の目標を設定したり、規則の決定、しつけを行い、また役割モデルとしてふるまう点で重要であると述べている。また、大島（2013）は、両親の夫婦関係と両親から子への支持的関わりが青年期後半の子どもの心理的健康に与える影響を研究し、父親は女兒よりも男児との接触が多く、男児に厳しく、男児に活動的な遊びを勧めることを示し、男子は父親を同一化の対象としながら、成人男性としての性役割行動を学ぶなど、男性の身近なモデルであることを示した。また、石川（2003）も、父親の養育行動と思春期の子どもの精神的健康に関する研究において、思春期以降の男子は母親よりも父親との情緒的な関わりが多く、父親の支援の影響が精神的健康にとって大きな影響力を持つことを示している。つまり、息子が成長する過程において、父親や母親との関わり、恋愛関係などを通して、その自分らしさを育んでいくのである。

以上のことから、息子にとっての父親という存在が、息子の成長に果たす役割について検討することは、重要な意義を持つと言える。本研究では、①青年期の男子の父親イメージ、②その恋愛観にはどのような特徴があるのかを検討し、青年期の男子のアイデンティティの形成に関連する知見を探究することとした。それらの解明は、青年期の男子の自立に関する研究、恋愛研究、父親イメージの研究の発展に少なからず寄与するものとなろう。

2. 目的

本研究では、研究Ⅰでは、青年期の男女を対象とし、金政（2002）の恋愛イメージ尺度、桜井（2003）の親からの自律性援助測定尺度を用いて質問紙調査を行い、父親イメージと恋愛観の関連を検討し、2つの尺度の回答状況を統計的に分析する。父親の役割を青年期男子がどのように認知しているのか、女子との相違点や共通点などを踏まえ、考察の裏付けとしたい。よって、本研究では、青年期男子に加え、女子も調査の対象とする。研究Ⅱでは、研究Ⅰを踏まえてインタビュー調査の対象者を決め、半構造化面接を行う。

3. 倫理的配慮

質問紙調査対象者、インタビュー調査協力者には、研究の目的、方法、目的以外にはデータを使用しないこと、プライバシーへの配慮、調査への参加は自由意志であること、いつでも調査協力を辞めることができること、個人の成績などには一切関係しないことなどを説明し、承諾を得た。質問紙調査は、文章上に明記し、Google フォーム上でインフォームドコンセントを得た。インタビュー調査の場合は、ウェブ会議用ソフト Zoom を用いてオンライン上で文書と口頭で説明し、承諾を得られた場

合に同意書への署名を依頼した。

なお、本研究は、筆者所属大学院の研究倫理委員会に、研究計画書等の書類を提出し、厳正な審査の手続きを経て、研究の承諾を得た上で実施している。

II. 研究 I : 質問紙調査

1. 調査方法

(1) 調査目的

研究 I では、金政 (2002) の恋愛イメージ尺度、桜井 (2003) の親からの自律性援助測定尺度を用いて質問紙調査を行い、父親イメージと恋愛観の関連を検討し、2 つの尺度の回答状況を統計的に分析し、インタビュー調査対象者を選出することを目的とする。

(2) 調査内容

調査時期 : 2021 年 7 月～8 月

対象者 : 私立 A 大学の学部生 3 年生、4 年生の 20 代男女。

質問紙調査の対象者は 119 名、内訳は男子 47 名、女子 69 名、その他 (性別無回答) 3 名であり、性別の判明しない 3 名は分析から除外した。大学 3 年生、4 年生を選出した理由は、就職活動など、自分自身の将来について考える機会が増える時期であり、親からも経済的・社会的・心理的な自立を試みはじめると考えられるためである。

質問紙の内容 :

①フェイスシート 4 項目 年齢、学年、性別、家族構成

②親からの自律性援助測定尺度 (桜井、2003) 20 項目、6 件法

桜井 (2003) によって作成された、大学生が認知した親からの自律性援助の程度を測定するための尺度である。自律性援助とは、子どもの行動をコントロールするために罰などのプレッシャーを与えるのではなく、子ども自身が何かを始めたり選択したりすることを励ます態度や行動のことを指す。本研究においても、大学生時代の青年が、父親の養育態度をいかに認知し、それが両親の夫婦関係の認知や自身の恋愛観にどのように関連しているのかを調べるために、本尺度を用いて父親イメージについて探索する。

③恋愛イメージ尺度 (金政、2002) 7 因子、28 項目、7 件法

金政 (2002) によって作成された、恋愛に対するイメージを測定する尺度である。この尺度を本研究で用いる理由は以下の 2 つである。1. 特定の他者を想定させずに形で質問紙に回答を求めるため、個人が現在持つ特定の関係性とは比較的関連の弱い、恋愛という事象へのイメージもしくは一般的な恋愛への期待や態度といったものを測定することが可能であるため。2. 想定相手如何によって、尺度の得点に変化することもないと考えられるため。

2. 先行研究より

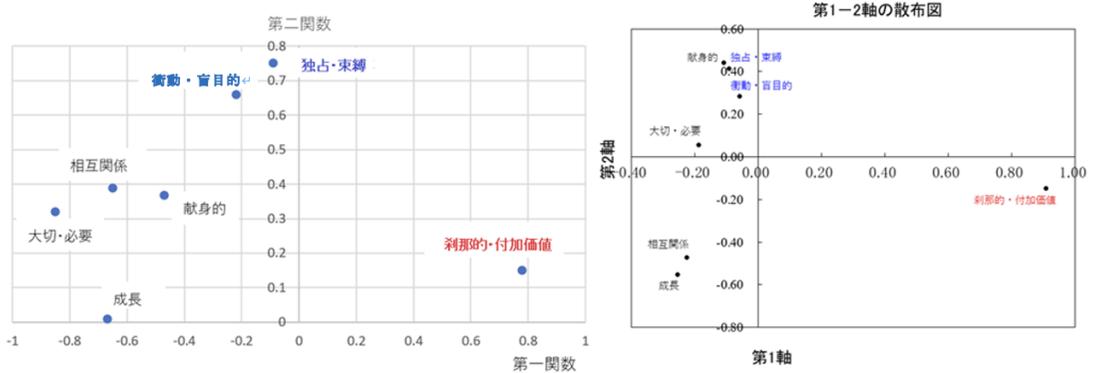
恋愛イメージ尺度では、因子分析で認められた7下位尺度と成人の愛着スタイルとの関連について判別分析を行った結果、恋愛イメージの下位尺度を以下の3つの観点からみることが可能であると判断された。

表1 恋愛イメージ下位尺度（金政、2002より筆者作成）

恋愛におけるポジティブイメージP	「大切・必要」	「成長」	「相互関係」	「献身的」
恋愛におけるネガティブイメージN	「利他的・付加価値」			
恋愛における不安イメージA	「独占・束縛」	「衝動・盲目的」		

図1の判別分析における第二関数を縦軸、第一関数を横軸にしてプロットした（図1左）。

図1 下位尺度間の距離（左：金政2002、判別分析 右：筆者、数量化IV類）



筆者のデータから恋愛イメージ下位尺度得点を出し、金政（2002）の下位尺度との相互関係を数量化IV類で調べたところ、金政（2002）とほぼ同様の傾向が見られ、上記の3つの観点よりデータ処理が可能であると判断された。（図1）P、N、Aの3つのイメージを用いるため、3次元8分割による男女別分析となる。ところが、8分割については、コロナ感染下で得られたデータが少ないこと、数値的扱いが煩雑になることから現実的ではないと考えた。本研究では、面接者を決める枠組みについてはPを基軸に考え、P、NあるいはP、Aの2次元4分割を行うことにした。Pを基軸に考えるのは、恋愛におけるポジティブイメージが高い被験者は父親イメージがよかったという基本的な仮説をもつゆえである。ただし、データを総観するには3次元8分割が必要である。

これらを踏まえ、親からの自律性援助測定尺度の得点を、恋愛イメージ尺度の7下位尺度を用いて、以下の①と②の2種類の分割による分析が可能であると考えられる。

- ①PとNによる2分割をつくる。②PとAによる2分割をつくる。

3. 調査結果

親からの自律性援助測定尺度の得点の男女比較は、女子の方が平均値は低く、分布に広がりがあっ

た。独立2群のt検定の結果、両者に有意差は認められなかった ($t=0.27$, ns)。したがって、恋愛イメージ尺度の得点により4分割あるいは8分割によって男女の違いが出るならば、平均値の比較では見えなかった傾向が発見される可能性がある。そして、各象限から面接者を選定しインタビュー調査を行って、それぞれの特徴の有無を調べることも可能となる。

2. で述べた、①と②の2種類で分散分析を行った所、次のような結果となった。

①PN4分割による分散分析結果

x軸：P、y軸：N、原点：PとNの平均値

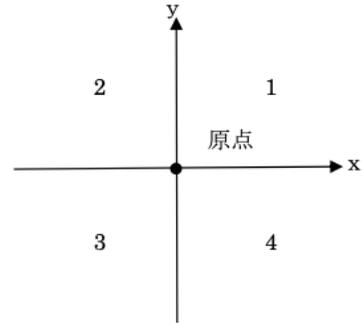
仮説（分割による推定）： $4>3$ 、 $1>2$

男子の結果： $4>1>3>2$

ほぼ仮説通りであるが有意差がなかった ($F=0.65$, ns)。

女子の結果： $4\div 3>2\div 1$

仮説通りではないが有意傾向が出た ($F=2.70$, $p=0.053$)。



②PA4分割による分散分析結果

女子は①のPN4分割で父親イメージの違いが見えたが、男子では見られなかったため②で分析を行う。本来は、P、N、Aの3次元8分割による男女別分析となるが、煩雑になりデータも少ないため、試行的にP、Aの2次元4分割を行った。

x軸：P、y軸：A、原点：PとAの平均値

仮説： $4>3$ 、 $1>2$

男子の結果： $4>2>1>3$ 仮説通りではないが有意傾向が出た ($F=2.52$, $p=0.071$)。

女子の結果： $4\div 2>1\div 3$ 仮説通りではなく有意差も出ない ($F=0.76$, ns)。

①②の結果、男女で分割する変数を変えると父親イメージの影響の違いが見えることが示され、研究Ⅱにおける面接者は、男子は②PA4分割で4象限から一人ずつ、女子は①PN4分割で4象限から一人ずつという男女で違う枠組みが妥当であるという結論に達した。

研究Ⅱの分析では次のことに注目していくこととした。

男子では、「2・4」と「3・1」、女子では、「2・1」と「3・4」で父親イメージ、両親の夫婦関係と恋愛観についてどのような語りの違いが出るのかについて調査する。

Ⅲ. 研究Ⅱ：インタビュー調査

1. 調査方法

(1) 調査目的

研究Ⅱでは、青年期の大学生にインタビュー調査を行い、父親イメージ、両親の夫婦関係と恋愛観にどのような関連があるのかなどについて、探索的に研究する。

(2) 調査内容

調査時期：2021年9月～10月

協力者：研究Iから選出した協力者（いずれも本研究の目的や方法について説明し、同意を得た者）を対象にインタビュー調査を行った。

インタビュー調査の対象者は、質問紙調査の結果を踏まえ、男女合計8名程度を予定していたが、実際にインタビュー調査対象者は、合計6名であった（男子4名、女子2名）。男子は、PA4分割で、4象限から一人ずつ。女子の同意者はPN4分割の1と3の2名であった。

表2 調査協力者の属性

	分割、象限	性別	学年
A	PA4分割4	男	4年生
B	PA4分割3	男	4年生
C	PA4分割1	男	3年生
D	PA4分割2	男	3年生
E	PN4分割1	女	3年生
F	PN4分割3	女	3年生

インタビュー内容：

選抜した対象者に対して、父親イメージ、両親の夫婦関係、恋愛観に関する半構造化面接をウェブ会議用ソフトZoomにて、1人あたり約40～60分程度で実施した。インタビューの内容は、協力者の同意を得た上でICレコーダーを用いて録音した。得られたデータは逐語化し、SCATによる分析を行った。

2. 分析方法

本研究では、インタビュー内容について、大谷（2008）、大谷（2011）、大谷（2019）をもとにSCATによる分析を行う。

SCATを用いた理由としては、明示的で段階的な分析手続きを有し、着手しやすいこと、比較的小規模の質的データの分析にも有効であることが挙げられる。また、1人のインタビュー内容をもとに、表面的な語りに隠された感情や関係性など、より潜在的な意味を見出せることも本研究の目的に適していると考えられる。

大谷（2011）によると、SCAT（Steps for Coding and Theorization）とは、「マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、<4>のテーマ・構成概念を紡い

でストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法」である。また、ストーリーラインとは、「データに記述されているできごとに潜在する意味や意義を、主に<4>に記述したテーマを紡ぎ合わせて書き表したもの」（大谷、2019）と定義されている。

本研究では、インタビュー内容の潜在的な意味を見出し、理解することを目的とするため、理論記述の作成は行わず、ストーリーラインの作成までとする。

3. 分析結果

インタビュー調査で得られた男女6名のデータをSCATにより分析シートを用いて分析し、構成概念を抽出した後、それぞれのストーリーラインの記述を行った。一人分のテキストには、父親イメージ、両親の夫婦関係、恋愛観の3つの質問に対する回答を含んでいる。文中においてゴシック体になっている部分が<4>に記述したテーマ・構成概念である。SCAT分析シートの量は膨大であるため、ここでは中略する。また、ストーリー・ラインについても人数を限定して載せる。ストーリーラインにてくる幼少期は小学生以前、児童期は小学生頃、初期思春期は中学生頃、中期思春期は高校生頃、青年期は大学生以降を指すものとする。

（1）男子の構成概念とストーリーライン

①Aさん（PA4 分割 4）

・父親イメージ：児童期における父親との1番の思い出は、父親との共通の趣味を通じた交流であり、子ども思いの父親から、児童期における父親からの影響を受けたことである。無邪気な子どもたちは、長期休みを母親の主導で過ごした。多忙な父親とは生活時間も合わず、父親とのすれ違いが起きていた。思春期以降の父親との関係の変化により、Aさんは父親の唯一の話し相手となった。このような時間を、Aさんは今までない父親との特別な時間と感じており、父親との本音の対話を嬉しく思っていた。兄弟の中でも、父親のお気に入りの息子であり、その父親に対して受容的な息子であった。しかし、父親の昔話や、父親の話し相手となることで、父親との対話への不満を抱いた。孤立する父親に対してAさんは責任を感じ、父親との役割の逆転が生じた。父親以外の家族とは、父親の孤立について共有していたが、彼だけが父親へのひそかな思いやりを抱いており、父親の唯一の味方である。さらに、周囲の友人からの話を聞き、家族の中で存在感のない父親は、理想の父親像とは異なると感じている。それに対して息子は母親の見守りを実感している。息子は、父親を気かけ、父親への思いやりを持ち、家族のまとめ役となっている。

・両親の夫婦関係：両親は、息子が児童期の頃から、長年交流できない両親であり、修復できない夫婦不仲である。Aさんにとって、児童期に夫婦不仲を知った衝撃はとても大きかった。しかし、一家の危機を知った息子たちは、両親の夫婦関係に対する兄弟の温度差が激しく、Aさんは兄弟からの白眼視を受けた。そして、両親の夫婦関係に挟まれる息子は、父親の支えとなっていった。父親以外の

家族との父親への非難の共有や父親への不満を共有する母子関係に A さんは罪悪感を感じ、母親への非難の気持ちも抱いている。一方で、日常においては、母親との気の置けない関係があり、父親との改まった関係がある。

・恋愛観：理想的な恋愛は、気遣いのない関係で距離のある関係や多くを期待しない関係である。両親の影響もあり、気楽な関係性や淡白な関係性を望んでいる。さらに、相手からの期待や期待されることへの抵抗感がある。家族不仲の世代間伝達などにより家族への献身になじみがなく、反面教師にしたいがあきらめの気持ちもあり、葛藤している。また、自分の価値観へのこだわりがあり、恋愛における考え方の一致が重要であると考えている。両親との恋愛についての対話や両親以外との対話もしながら、恋愛観の再構築を行っている。

②Bさん（PA4 分割 3）

・父親イメージ：児童期に両親の役割交代が生じ、父親と密着した日常生活となった。父親は、息子の行く末の心配から、説教や自身の話を息子にした。父親の挫折を知った息子は、父親への反発心を抱き、父親とは異なる価値観を構成していった。しかし、息子は父親の顔色を窺い本音を隠す生活を続けた。父親との距離が縮まると、父親をリードする息子は頑固な父親をあしらうようになった。息子の一番の思い出は、父親を見返す努力をしたことである。息子は心配する父親をよそに、父親離れを成し遂げ、満足する結果を手に入れて、父親からの自立を果たした。青年期になり、父親との距離が開き、薄い関係となった。父親との共通点は、特定の人以外には頼らないという強い自立心である。そして、息子は、父親と異なる意志を持ち合わせている。また、両親の相互依存関係により、母親からは父親代わりの息子として処遇されている。彼は、両親の夫婦関係を反面教師として、理想の夫婦関係を思い描いている。

・両親の夫婦関係：Bさんは、両親の相互依存関係を見て育ち、両親の密着な夫婦関係への憧れがある。一方で、Bさんが児童期の頃に姉の自立という出来事があり、緊密な夫婦関係に悩む母親にとって、家族の中での唯一の支えである。さらに、支え合いに喜びを感じる母親と息子という関係があり、父親と相反する息子という側面もある。Bさんは、両親を原型とする家族関係について考えを巡らし、両親を越える理想の夫婦像を思い描いている。

・恋愛観：理想の恋愛関係は、一心同体の間柄で恋人にすべてを求める関係である。自身の恋愛観を考える中で、父親へのライバル視があり、将来の生活は、両親の夫婦関係を越える理想的な生活を思い描いている。恋愛と結婚は一直線上にあると考えており、すべてを分かち合い密着した夫婦関係を早期から望んでいる。このような考えに至ったのは、初期思春期での恋愛体験からである。さらに、中期思春期における孤立を経験し、共通の関心分野や内面重視の考え方となった。初期思春期からの父親との交流によって父親からの影響を受けた息子は、青年期において、関心分野で父親への回帰が生じた。

また、Bさんは、両親の夫婦関係に憧れながらも反面教師としており、共通の関心分野を持ち、すべてを共有する関係を望んでいる。しかし、Bさんは希薄な他者への信頼感と対話への抵抗感がある。さらに、息子に恋愛話をする父親に対して、息子は父親との恋愛話への躊躇があり、母親に忍耐を強いる父親への非難の気持ちを抱いている。

(2) 女子の構成概念とストーリーライン

①Eさん (PN4 分割 1)

・父親イメージ：中期思春期における父親との対話において、娘の主体性を尊重する父親の姿が印象深かった。進路変更の際も、アドバイスの多い母親に対し、娘の気持ちを尊重する父親、娘の主体性を尊重する父親であり、父親への感謝が大きい。また、危機的状況での家族との別離の際のいざという時の父親の気遣いを嬉しく思う娘であった。一方で、日常的には、父親との心理的距離を感じており、父親以外の家族との頻繁な連絡を取っている。初期思春期以降の葛藤の唯一の相談相手であり、アドバイスをする母親は、父娘の会話を促す母親の働きかけによって、父親とはや母親を介した交流があり、他愛のない話をすることもある。

また、初期思春期の娘の悩みを共有する家族の中で、娘の話最後まで真剣に聞く父親であった。多少的外れな父親ではあったが、父親からの初めての励ましを喜ぶ娘は、父親の気持ちへの感謝を抱き、父親思いの娘である。と同時に、父親の話に水を差す母親に対し、娘は父娘の会話に干渉する母親への不満を募らせた。

家族を尊重する父親は一家の大黒柱であり、大事な時の支えである。

・両親の夫婦関係：両親の恋愛に興味を持つ初期思春期の娘に対し、恋愛に積極的な母親像を語り、母親に押し切られた父親であったことを吐露した。理想的な結婚を思い浮かべていた娘であったが、両親の結婚について話を聞き、結婚観の現実的な修正が起きた。また、周囲の目を気にする初期思春期において、両親の結婚の経緯に葛藤を抱く娘をよそに、そんな娘の心情を知らない母親であった。

また、幼少期の家庭不和の際に、夫婦の危機を娘に相談する母親に対して、両親の離婚への不安を抱えながらも冷静な対応をする幼い娘は、母親の主体性を尊重する娘であった。一方で、父親に肩入れしていた幼少期の娘は、母親に対する否定的な思いもあったため、父親と母親を天秤にかけることがあり、また、両親の喧嘩に背を背ける姉妹であった。

Eさんが、初期思春期の頃に、父親の改心によるものなのか、夫婦の和解が行われ、父親を思い通りに動かす母親となった。また、父親との対等な関係を求める母親に対し、母親の言いなりになる父親、自己主張しない父親である。このように小言の多い母親に対し、不満を溜める父親という夫婦関係があるなかで、ゆっくりとした夫婦関係の改善が行われていった。

さらに、Eさんが青年期になり、親からの自立をすると、母親視点からの父親の見直しが起こり母親の再評価に結びついた。また、適切な距離感やペットを中心とした家族関係になったことなど、様々

な要因から家族関係の変化も生じた。

・恋愛観：Eさんは、緊密な恋愛関係への抵抗感があり、距離のある淡白な関係を望んでいる。青年期におけるひそかな初恋により、身体的な接触についての空想や相互依存、緊密な恋愛関係への抵抗を想像している。また、頻繁に母親への恋愛相談を行っており、母親は娘の恋愛相談に乗り、明確な助言を与える。さらに、娘は、母親からの恋愛の応援を受け、母親の前向きな助言によって恋愛関係の見直しをする。一方で、母親は、父親に対する矛盾した評価や娘の対象選択への口出しをするという一面もある。娘は、両親の姿を見ており、家の中での決め事など父母の役割の違いがあることを認識している。父親は、自己主張の強い母親の意見をまとめる役割を果たしており、最終的には父親の決定に従う母親という関係性である。さらに、父親との恋愛話に対する恥ずかしさがあるが、娘以上に恋愛話を避ける父親である。そのため、父娘での恋愛話はないが、娘は父親を基準とした対象選択を考えている。

②Fさん（PN4 分割 3）

・父親イメージ：幼少期から相思相愛の父娘関係であり、大好きな父親との児童期の思い出が多くある。Fさんが中期思春期以降も、父親の献身を当然と思う娘であった。青年期になり、親からの自立を果たしてからも、日常的に父親からの密な連絡があることを当たり前に感じている。一方で、娘を気遣う母親からの頻繁な連絡がある。

・両親の夫婦関係：両親はとても長い付き合いである。衝突することもあるが、マイペースな父親を巻き込む母親は、夫婦関係を修復する母親でもあり、自分たちで関係を修復できる夫婦である。である。Fさんは、自分と父親の類似点を感じており、母親の気分に左右される父娘でもある。さらに、母親への愛情深い父親の行動を見て照れる娘は、恵まれた家族関係、親密な家族であることを実感している。

また、青年期における親離れにより、今まで父親への反発や父親への不信も感じていたが、父親の再評価が行われ、父親への感謝を自覚した。

・恋愛観：初期思春期からの厳格な恋愛観を持っており、恋愛に対する消極的な考えもあるが、切磋琢磨できる関係性が理想の恋愛関係であると考えている。中期思春期では禁欲などを経験しながらも恋愛観の深化が生じた。青年期における恋愛体験もある。しかし、青年期における規律のない恋愛関係への批判や相互依存関係への批判もある。

さらに、母親を恋愛のモデルとする娘は、父親をもとにした対象選択を考えている。

4. 調査結果

男子では、自身の恋愛観に両親の夫婦関係や父親の姿を関連付けていることが示された。女子については、女子は、男子よりも母親との密着が強く、母親の語る父親像に影響を受け、母親との頻繁な

恋愛相談を行い、将来の対象選択を考えていることが示される語りが得られた。

IV. 考察

1. 研究Ⅰについて

まず、男子では、2・4は、父親イメージが良好であると考えられる。特に4は、最も父親イメージが良好であると考えられ、Pが高く、Aが低かった。そのため、父親イメージの良好さは、恋愛に対する不安の軽減や良いイメージに関連する可能性がある。1・3は、父親イメージが良好ではないと考えられる。特に3は、最も父親イメージが良好ではないと考えられ、PもAも共に低かった。そのため、父親イメージが良好ではないことは、恋愛に対するイメージの乏しさに関連する可能性がある。

女子では、Nの大小だけで父親イメージが2分割される傾向にあり、Pは父親イメージには関係しないことが示された。1・2は、父親イメージが良好ではないと考えられる。また、1は、Nが高いことが示された。そのため、父親イメージが良好ではないことは、恋愛に対するネガティブなイメージとの関連が考えられる。3・4は、父親イメージが良好であると考えられ、3は、Nが低いことが示された。そのため、父親イメージの良好さは、恋愛に対するネガティブなイメージと関連している可能性がある。

2. 研究Ⅱについて

次に、研究Ⅱについて研究Ⅰの結果を踏まえて考察を行う。大谷(2019)によれば、SCATは、個々の観察やインタビューの個性が重視され、複数の個別のインタビューの結果を、無理に「統合」する必要はなく、その個性に着目して相互の検討を行うべきとされている。また、結果を突き合わせたい場合は、個々の分析結果の共通性(一般性)と差異性(個性)を検討し、その共通性の背景と差異性の背景を検討することを推奨している。ここでは、研究Ⅰで得られた上記の結果をもとに、研究Ⅱのインタビュー調査のデータの共通性(一般性)と差異性(個性)を検討し、背景について考察する。

本論文では、第1節での考察を踏まえ、男子は、Aさん(PA4分割4)とBさん(PA4分割3)を中心に、父親イメージと両親の夫婦関係が恋愛観にどのように関連しているのかについての共通性および差異性の検討を行い、背景について考察することとする。女子は、Eさん(PN4分割1)とFさん(PN4分割3)についても、男子と同様に検討し考察を加える。

(1) AさんとBさんの共通性(一般性)および差異性(個性)

Aさんは、研究Ⅰから、Pが高く、Aが低いことが示されている。父親イメージの良好さは、恋愛に対する不安の軽減や、恋愛に対する良いイメージを抱くきっかけに関連している可能性が示唆された。研究Ⅱから、Aさんは、父親との関わりも多く、父親に対する非難ではなく、父親を思いやるよ

うな語りが多いことから父親イメージが良好であると判断された。母親とは気の置けない関係であるが、父親を非難する母親への非難や葛藤、父親を思う気持ちが示されている。また、Aさんは母親や父親に気を配り、不仲な家族のまとめ役となっている。

理想的な恋愛は、気楽で淡白な関係であり、恋愛に対する考え方の一致を重視している。家族不仲について、その世代間伝達を語るAさんは、家族への献身になじみがなく、両親の夫婦関係を反面教師にしたいと思いつつも、今の自分が恋愛関係を持つことに葛藤している。そして、両親や友人などと話しながら、恋愛観についての再構築を試みている。研究Iで示された恋愛に対するポジティブなイメージとは逆に、ここでは恋愛に対して葛藤が認められ、自身の恋愛についての揺らぎが示されている。

Bさんは、研究Iから、PもAも低いことが示されており、最も父親イメージが良好ではないと考えられた。つまり、父親イメージが良好でないことは、恋愛に対するイメージの希薄さにも関連する可能性があるのではないかと考えられた。研究IIで得られた内容から、Bさんは、児童期から父親に対する反抗心などがあり、父親への思いやりはあまり語られない。父親からの影響は認めつつも批判も語られ、父親イメージもネガティブなものが多い。また、密着した両親の夫婦関係をうらやみながらも、母親を困らせる父親に対して非難を抱いている。母親からは父親代わりに相談され、母親の肩を持つ息子として、母親と一体化している。

理想的な恋愛は、恋人とすべてを分かち合う一心同体の関係である。恋愛と結婚を一直線上に考え、早期からの密着を望んでおり、恋愛に対しての意欲も伺える。一方で、他者への信頼感は希薄で、対話への抵抗感を持ち、実際の恋愛体験は乏しい。研究Iでは、PもAも低かったが、恋愛に対するイメージとして不安などはあまり語れなかった。恋人と密着した関係を望んでいるが他者への信頼感が希薄であり矛盾している点もあるため、実際の恋愛経験は乏しく、研究Iと研究IIでは異なる結果になったのではないかと考えられる。また、両親の夫婦関係に憧れながらも反面教師にして父親をライバル視し、将来は両親を越える夫婦関係を構築したいと望み、父親に対する非難や父親イメージが良好ではないことが伺える。

以上より、父親に対する見方や気持ちには、上記のように差異性（個別性）があったが、2人の共通性（一般性）として、父親の姿や両親の夫婦関係をもとに自身の恋愛観を考えている点が指摘できる。また、父親の母親や家族に対する姿を見て、自分自身のモデルにしていることも挙げられる。さらに、母親からの父親に対する語りも、同様に息子の父親イメージに影響していた。父親イメージが良好であることと、恋愛に対しても良好なイメージをもつこととの間に、直接的な関連は指摘できないが、自分自身の恋愛観と両親の夫婦関係や父親の姿を関連付けて考えていることが明らかになった。

（2）他の男子の傾向について

Cさんは、研究Iから、PもAも高いという結果であり、父親イメージはあまり良好でないことが

示された。研究Ⅱの内容から、Cさんは父親と関わりの薄い幼少期を過ごし、厳格な父親イメージを持っていたことが示された。しかし、成長と共に父親との関わりが増え、父親のやさしさを発見し、父親の見直しに繋がり、父親イメージは肯定的なものに変化した。他方で、父親との日常生活の中の関わりは少ないため、研究Ⅰでの父親イメージはあまり良好とはならなかったと考えられる。また、仲のいい両親像を思い描いているが、その一方で、両親の夫婦関係を取り持つ息子としての役割も示されている。

Cさんの理想的な恋愛とは、両親の関係のような気楽で、共通する価値観を持つものである。母親と恋愛の話をし、父親とは距離を感じつつも、恋愛については父親の姿から学ぼうとしているなど、両親の姿を肯定的に受け止め、自身の恋愛観として取り入れている。ただし、Cさんは、恋愛観についてのインタビューの際、喋りにくそうにしていたことが印象的だった。研究Ⅰでは不安イメージが高いという結果が示されたが、語りの中では恋愛における不安について、直接的な言及はあまりみられなかった。インタビュー調査中の様子から、必ずしも不安が低いとは言えないという印象を筆者は抱いた。父親との恋愛話についての距離感を感じて父親を同一化の対象とすることが難しく、恋愛について父親をもとにしながらも恋愛についても肯定的なイメージが語られず、実際の不安は高いことが推測され、インタビュー時の様子にも関連するのではないかと考えられる。

Dさんは、研究Ⅰから、Pは低く、Aが高いという結果であり、父親イメージは良いことが示された。研究Ⅱの内容から、Dさんは、児童期から父親と趣味を通じた交流が多く、父親も息子もお互いに関心を持っていることが示された。一方で、父親に圧倒され、父親をライバル視できていなかった。やがて、父親に相談するなど、父親と息子の関係は充実したものへと変化した。これらから、父親に対する葛藤を抱きつつも、比較的肯定的なイメージを持っていると理解される。両親の夫婦関係も、固い絆で結ばれて仲が良く、相互協力がみられ家族の仲も円満である。一方で、円満な夫婦関係を自慢する父親に対して、息子は距離を置いている。多くを語らない母親だが、行動規範などを学んだ。

理想的な恋愛は、両親の夫婦関係であり、恋愛についての考え方の一致を重視し、母親からの恋愛観の取り入れが大きい。研究Ⅰでは、Pが低く、Aが高いことが示されたが、インタビュー調査では、母親の恋愛観をそのまま自分の恋愛観としていると語られ、自分自身の恋愛観に確固たる自信が持っていない可能性が示唆された。また、恋愛話への躊躇がある一方で、深い人間関係を重視し、実際の恋愛関係への敷居を高く感じており、恋愛のポジティブイメージが低く、不安が高いことに関連するのではないかと考えられる。

(3) 女子の傾向について

研究Ⅰより、Nの大小だけで父親イメージ（親からの自律性援助測定尺度）が2分割される傾向にあり、Pは父親イメージに関係しないとの結果が示されている。

まず、Eさんは、研究Ⅰにおいて、Nが高く、父親イメージが良好ではないという結果が示されて

いる。研究Ⅱの内容から、いざという時に娘の主体性を尊重する父親の姿や気持ちを嬉しく感じている。父親への感謝が大きく父親思いで、父親に対する非難の気持ちは語られなかった。母親は何事においても口数やアドバイスの多い母親に対し、家族の気持ちを尊重する父親を一家の大黒柱であるとみなしており、研究Ⅰの結果とは異なり、Eさんの父親イメージは必ずしもネガティブであるとは言いがたい。また、父親と娘の会話に水を差す母親に対し、Eさんは母親を疎ましく思っている。以上を考え合わせれば、実際に、日常的に多く関わっているのは母親であり、父親との現実の関係は母親に比べて少ないことが、研究Ⅰにおける、良好ではない父親イメージにつながったものの、より内的な父親イメージの中には良好な面があることが研究Ⅱで示されたものと考えられる。

さらに、Eさんが幼少期の頃は、両親の夫婦関係は良好ではなく、母親から夫婦の危機を相談して、幼い娘は冷静に対応をしていたが、複雑な葛藤を抱えていた。その後、徐々に夫婦関係が改善され、Eさんが青年期に入り親から自立したのち、家族の仲が深まっていった。両親についても、客観的に見られるようになり、父親と母親の再評価に結び付いた。幼少期には、父親の母親に対する態度に疑問を抱いており、研究Ⅱにおいて直接的には語られなかった父親へのネガティブなイメージが研究Ⅰに反映された可能性が存在する。また、両親の結婚の経緯について葛藤を抱いているEさんは、理想と現実が異なることに直面し、動揺も感じている。

Eさんの理想的な恋愛は、緊密な恋愛関係への抵抗感が大きく、距離のある淡白な関係である。恋愛に対するネガティブなイメージが語られ、研究Ⅰの結果に一致していた。また、母親にはよく恋愛相談をしているが、一方で、母親の父親に対する評価には矛盾があり、娘の恋愛観に影響している可能性もある。父親との間では、恋愛を話題にすることには恥ずかしさを感じつつ、自分の対象選択にあたっては父親をふまえていることも特徴的である。

Fさんは、研究Ⅰにおいて、Nが低く、父親イメージが良好であるという結果が示された。研究Ⅱの内容から、Fさんは、幼少期から父親とは相思相愛であり、児童期においても父親との多くの思い出が語られた。父親への不信が語られながらも、父親イメージは比較的ポジティブで、研究Ⅰの結果と一致していた。さらに、青年期に入り、親から自立をした後も父親からの日常的な連絡や、変わらぬ父親の愛情を当然と思いながら、感謝の気持ちも抱くようになった。さらに、両親の円満な夫婦関係を気恥ずかしく思う気持ちもあるが、親密な家族であることを実感している。また、母親の気分に左右されることは、父親と共通していると語っている。また、規律のない恋愛関係や相互依存関係への批判が語られ、理想的な恋愛は、切磋琢磨できる関係という厳格なものであった。研究Ⅰの結果とは異なり、恋愛に対するネガティブなイメージが多く語られたが、身につけてきた否定的、禁欲的な価値観が影響している可能性も考えられる。一方で、青年期での恋愛経験がネガティブな恋愛観を中和した可能性もあり、研究Ⅱでは語られなかった恋愛観が研究Ⅰに反映されていた可能性がある。また、母親を恋愛のモデルとし、父親をもとにした選択対象を考えてもいる。

以上のことから、女子においては、男子とは異なり、父親を自分自身の恋愛モデルにするというよ

り、父親の姿や父親の母親に対する態度をもとにして、自分自身の対象選択を考えている可能性が示された。また、男子も母親との関わりは多かったが、女子の方が母親との距離が近く、母親の語りから父親イメージも影響を受けていると考えられる。

V. 本研究のまとめと今後の課題

1. 総合的考察

これまで述べてきた研究Ⅰと研究Ⅱの結果と、その考察を踏まえて、総合的な考察を行う。

まず、研究Ⅰと研究Ⅱに示された結果において、矛盾する特徴が示された点について検討する。研究Ⅰで使用した桜井(2003)の親からの自律性援助測定尺度は、父親との日常的な関わりについての質問が多く含まれているが、研究Ⅱでのインタビュー調査では、男子のAさん、Cさん、女子のEさんなど、父親との日常的な関わりが少なさや語られた。このことが、研究Ⅰと研究Ⅱにおける異なる結果に繋がった可能性が存在する。また、恋愛観に関する研究Ⅱのインタビューでは、男子のAさん、Bさん、女子のEさん、Fさんなど、実際の恋愛体験についての語りがみられている。ところが、金政(2002)の恋愛イメージ尺度は恋愛観を測る尺度であり、実際の恋愛関係を測定するものではない。実際の恋愛関係と、より内面的な恋愛観の間には関連があるが、必ずしも恋愛観とは言えない現実的な内容がインタビューに反映された可能性がある。このことも研究Ⅰと研究Ⅱの結果の違いに影響を及ぼした可能性がある。

次に、父親イメージ、両親の夫婦関係と恋愛観の関連について、研究Ⅰと研究Ⅱから示された点について検討する。6名の協力者のデータの分析結果から、父親イメージや両親の夫婦関係には、恋愛観に少なからず関与していることが示された。第1章でも述べたように、山内・伊藤(2008)の量的研究では、青年期における恋愛には、両親の夫婦関係や結婚観が直接的にも間接的にも、青年に与える影響が大きいと示しているが、本研究の質的調査でも同様な傾向が示唆された。

また、大島(2013)の量的研究では、「多くの妻が好ましいイメージの父親像を子どもに伝えていることが、子の心の中における父親の存在を可能にしている」ことが指摘された。本研究の質的調査においても、男子のCさん、Dさん、女子のEさん、Fさんなど、母親から聞く父親の評価や母親に対する父親の態度と子どもの良好な父親イメージとの関連が示唆されている。一方で、男子のBさん、女子のEさん、Fさんなど、母親から聞く父親へのネガティブな評価も子どもの父親イメージに影響している可能性が示された。この傾向は、特に男子よりも女子に顕著であるように思われたことは興味深い。

また、男子は父親を同一化の対象としながら、成人男性としての性役割行動を学ぶのであり、父親は直接的な存在として、男性の身近なモデルとされるが(大島, 2015)、男子のAさん、Dさんなど、児童期の頃から父親と共通する趣味を通じた交流が多く、お互いに張り合う関係性も浮き彫りになっている。

小野寺（1984）は男子にとってのライバルである父親像を指摘したが、本研究でも4名の男子に共通して、父親をライバル視できるようになったことが語られ、父親の母親に対する姿を見て、父親を自らの男性モデルとして取り入れたり、反面教師として、恋愛について考えを巡らせている姿が見いだされた。

石川（2003）は、思春期以降の男子に対する父親の支援の重要性を指摘した。本研究においても、思春期以降は父親との情緒的な関わりが増加し、父親を同一化の対象として自分自身の将来を考える姿が語られ、男子が思春期、青年期と成長し、心理的自立を果たす上で父親の存在の重要性が示されている。

一方で、小野寺（1984）は、青年期の母親と娘は互いに心を開き内心を吐露できる関係を持つ傾向を指摘し、大島（2015）は、娘は同性であるため母親の影響を受けやすく、最近では「一卵性母娘」という青年期以降の娘と母親の密着性の強い傾向を指揮した。本研究でも、2名の女子に共通して、母親との密着が強く、恋愛相談などを頻繁に行い、お互いに本音を吐露し合っていることが示された。

さらに、小野寺（1984）は、娘から見て魅力のある父親の第1要因は「両親の夫婦関係が娘にとって理想的なものかどうか」であることを量的研究から指摘し、父親は娘にとって夫婦関係や妻という母親を通じた間接的存在であると示唆した。本研究でも、2名の女子に共通して、母親から語られる父親の姿を評価する娘や、両親の夫婦関係を通して父親について判断している姿が語られており、特に娘において母親を通じた父親イメージの形成が示唆された。他方で、男子のAさん、Cさん、Dさんでは、母親から語られる父親像だけで判断せずに、父親の実際の姿を加味して判断する傾向が示唆され、息子と娘の違いが示された。

また、青年期の娘の異性観について父親が影響を与えていると小野寺（1984）は述べている。本研究の質的調査でも、2名の女子に共通して、娘は、父親の母親に対する姿を見たり、母親からの父親に対する評価を聞き、自分自身の中で作り上げた父親イメージをもとに将来の自分の対象選択を考えており、性役割観の発達や女性としてのアイデンティティの確立に父親が重要な役割を果たしていることが示唆された。

以上のように、男子にとって父親は同一化の対象であり、直接的な存在として、自立を果たし「一人前」の大人になる過程において重要な存在であることが示された。また、女子にとっても親からの自立を果たし、対象選択を行い「一人前」の大人として成長する心理的自立の過程において、父親の存在が一定の役割を果たしていることが示された。

2. 今後の課題

研究Ⅱの質問項目に対して、インタビューが困惑している場面も見られ、語りの内容の深さに違いが生じた。今後の課題としては、父親との日常的な関わりや恋愛観について、より詳しく聴取できるような質問項目を設定し、質問項目の順番も考慮したいと考えている。

さらに、新型コロナウイルスの影響もあり、対象者の募集には制約があった。研究Ⅱのインタビュー調査はオンラインで実施したが、ノンバーバルな情報はそぎ落とされていたことも考えられ、その難しさを感じた。今後、さらに人数を増やし、対面での研究を行うことができれば、より詳細に探索することが可能であろう。

また、現実的な恋愛関係がいかにして恋愛観として内在化されているのかなど、経時的な研究も今後の課題である。さらに、異性愛に限らない多様な恋愛関係と父親との関係についての研究は、ほとんど行われていないため、今後の検討課題としていきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり指導を受けました本学大学院の遠藤幸彦教授に心から御礼申し上げます。また、統計につきましてさまざまなご指導をいただきました教職研究科元教授の桐山信一先生にも心より感謝申し上げます。そして、貴重な助言をくださいました、本学院の諸先生方、共に学び励まし合った臨床心理学専修の同期の皆様、調査にご協力いただきました方々にも御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 安達喜美子（1994）「青年における意味ある他者の研究—とくに、異性の友人（恋人）の意味を中心として—」『青年心理学研究』第6号,pp.19-28
- 石川周子（2003）「父親の養育行動と思春期の子どもの精神的健康」『家族社会学研究』15,2,pp.65-76
- 乾匡登・西村昭徳（2016）「大学生の悩み体験に対する意味づけと自己成長感との関連」『東京成徳大学臨床心理学研究』16号,pp.38-44
- 大石美佳・松永しのぶ（2008）「大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成—」『日本家政学会誌』Vol.59,No.7,pp.461-469
- 大島聖美（2013）「夫婦間の信頼感と両親からの支持的かかわりが若者の心理的健康に与えらるる影響の男女差」『発達心理学研究』第24巻,第1号,pp.55-65
- 大久保摩里子（2009）「青年期の延長にみる親子関係の変化」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』第12号,pp.27-36
- 大野祥子（2016）『「家族する」男性たち おとなの発達とジェンダー規範からの脱却』東京大学出版会
- 大野久・三好（森本）昭子・内島香絵・若原まどか「第43回総会発表論文集 青年期のアイデンティティと恋愛」『日本教育心理学会総会発表論文集』自主シンポジウム18
- 大谷尚（2008）「4ステップコーディングによる質的データ分析法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第54巻,第2号,pp.27-44

青年期における恋愛観と父親イメージの研究

- 大谷尚 (2011) 「SCAT : Step for Cording and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」 感性工学 10 (3) ,pp.155-166
- 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会
- 小野寺敦子 (1984) 「娘から見た父親の魅力」『心理学研究』 vol55, No5, pp.289-295
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 (1998) 「父親になる意識の形成過程」『発達心理学研究』第 9 巻, 第 2 号, pp.121-130
- 柏木恵子 (1993) 『父親の発達心理学 父性の現在とその周辺』川島書店
- 樫津祥貴 (2004) 「現代の父性に関する基礎研究」『佛教大学教育学部学会紀要』 3, pp.135-149
- 金政裕司 (2002) 「恋愛イメージ尺度の作成とその検証 : 親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から」『対人社会心理学研究』 2, pp.93-101
- 川喜田二郎 (1970) 『統発想法・KJ 法の展開と応用』中公新書
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂
- 厚生労働省 (2010) 『育 MEN イクメンプロジェクト 育てる男が、家族を変える。社会が動く。』
<https://ikumen-project.mhlw.go.jp/>
- 桜井茂男 (2003) 「子どもの動機づけスタイルと親からの自立性援助との関係」『筑波大学心理学系』 Vol.15、 pp.25-30
- 高坂康雅 (2016) 「日本における心理学的恋愛研究の動向と展望」『和光大学現代人間学部紀要』第 9 号, pp.5-17
- 高坂康雅 (2018) 「大学生における心理的自立と経済的自立・社会観との関連」『和光大学現代人間学部紀要』第 11 号, pp.123-134
- デッカー清美・丸山昭子 (2015) 「父親認識に関する文献研究」『日農医誌』 11, 64 巻, 4 号、 pp.718-724
- 平田陽子 (2010) 「青年期における「自立」と生きがい感 : 心理的自立と対人依存欲求の視点から」『九州大学心理学研究』 11、九州大学大学院人間環境学研究院、 pp.177-184
- 皆川邦直 (2003) 『子育て心理教育』安田生命社会事業団
- 皆川邦直 (2014) 「父であること : 今と昔」『思春期青年期精神医学』 24 巻, 第 3 号, pp.1-12
- 皆川邦直著 (2018) 『精神科医の子育て心理教育』岩崎学術出版社
- 山内星子・伊藤大幸 (2008) 「両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響 : 青年自身の恋愛関係を媒介変数として」『発達心理学研究』第 19 巻, 第 3 号, pp.294-304
- 山田裕子 (2011) 「大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連」『青年心理学研究』 23, pp.1-18
- 皆川邦直 (1990) 『親であること子であること』女子パウロ会
- Erik Homburger Erikson (1959) Identity and the life cycle, International Universities Press ; E.H. エリクソン著 (2011) 『アイデンティティとライフサイクル』西平直・中島由恵訳, 誠信書房
- Harry Stack Sullivan (1953) The interpersonal theory of psychiatry ; H.S. サリヴァン著 (1990)

『精神医学は対人関係論である』中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鐘幹八郎訳、みすず書房

John Coleman、Leo Hendry (1980) *The nature of adolescence*; J. コールマン・L. ヘンドリー (2003)

『青年期の本質』白井利明訳、ミネルヴァ書房

Peter Blos (1962) *On Adolescence* Free Press; ピーター・ブロス (1974) 『青年期の精神医学』野

沢栄司訳、誠信書房